

日本語学習者のスタイル運用に対する母語話者の評価 —教える必要性の再検討—

今村 圭介

1. はじめに

2000年代から日本語学習者のスタイル切り換えやスタイルシフトの体系性や、その背後にある要因、また切り換え能力に関する研究が盛んに行われるようになってきた。そのような研究は日本語学習者と母語話者の違いを体系的に記述し、当然それを日本語教育に活かすことが模索されている（李 2005、上仲 2007、寺尾 2010、今村 2013 など）。それらの研究は当然、日本語学習者はスタイルを切り換える必要があるという主張の上に成り立っていると言える。しかし、スタイル運用を日本語学習者にどの程度教える必要があるのか、また根本的に教える必要があるのかという点は問われてこなかった。そのため、「外国人なのだから通じれば、場に適切なスタイル運用¹などする必要がないのではないか」というように問われた場合に理論的に反論することが難しいであろう。

本稿は、日本語学習者のスタイル運用に対する母語話者の評価を実験的に明らかにすることで、スタイル運用を教育する必要性について理論的な裏付けを得ようとするものである。スタイル運用上のミスはそもそも母語話者評価を下げるのか、文法の誤用に比べてスタイル運用上のミスがどの程度影響するのか、スタイル運用上で何が評価を下げるのかを明らかにする。

2. 母語話者評価研究とは

母語話者評価研究は、小林（2000）に説明があるように、日本語母語話者の学習者の発話のどこに注目し、どのような評価を下すかを明らかにすることで、教えるべき項目の選定や順序の決定に役立つものである。近年、野田編（2005、2012）をはじめとして、日本語教育において教える内容の再吟味が盛んに議論されるようになっている。横溝（2004）が述べるように、シラバスの構築には、日本語教師の経験値、日本語学研究者の理論的枠組み、日本語教育学研究者の理論的な枠組み、学習者のニーズ調査などが含まれるが、母語話者評価研究の発展によって、シラバスの再吟味がさらに進むと考えられる。山内（2004）、渡部（2004）では、日本人評価者のコメントの中に学習者のスタイル運用に関する否定的なコメントが見られるが、そのような印象が母語話者に共通するものなのか、また特にどのようなスタイル運用上の逸脱が評価を下げるかなどは明らかになっていない。

¹厳密には、スタイルは、音声、音韻体系、統語、文法、意味論、語彙、談話の中の広い意味での話し方まで内包するが（Bell 1997:240）、本稿ではこれまでの研究で扱われてきたように、丁寧体・普通体を中心とした語彙・文法レベルの形式について扱っていく。

3. 実験計画

3.1 研究設問

本稿では実験の実施に先立ち、以下のリサーチクエッションを設定した。なお、適切なスタイル運用とは友人同士でカジュアルなスタイルが使えているか、という点なども含むが、本稿ではフォーマルな場でカジュアルなスタイルを使う方が評価への影響が大きいと考え上記の課題を設定した。

- ✓ 日本語学習者が丁寧体と話すべき場面で、普通体をはじめとしたカジュアルな表現を使用した場合、どの程度母語話者の評価が下がるのか
- ✓ どのような表現が特に評価を下げるのか
- ✓ また、評価の下げ方はフォーマリティーにより差が見られるか

3.2 実験手順

実験は以下の手順で行った。次小節以降でその詳細について記述する。

- 1) 留学生の対学生、対教授の会話スクリプトを作成する。
- 2) 留学生役、学生役、教授役の音声をそれぞれ録音し、その後音声編集により刺激会話を作成する。
- 3) 日本語母語話者に対して刺激会話を用い、約 30 分の尺度評価実験を行う。

3.3 会話スクリプトの作成

会話スクリプトの作成に際して、母語話者の評価を下げる可能性がある、丁寧体からの逸脱表現（以下便宜的に「スタイルの誤用」とする）を表 1 のように選定した。項目は国立国語研究所『日本語学習者会話データベース（縦断調査編）』及び『KY コーパス』の中で日本語学習者が使用していたものを選定した。²また比較対象として文法の誤用を含めた。なお、項目は『寺村誤用例データベース』にみられた文法誤用を参考に選定した。

スクリプトはまず、丁寧体を中心とした<ベース会話>を作成した（表 2 の左）。そしてそのスクリプトを表 1 の項目（表 2 の右）に置き換えた<スタイルの誤用>、また同様に<文法の誤用>を作成した。

表 1 実験調査項目に関する記述

カテゴリ	名称	特徴
スタイルの	A1質問文ノ	相手への質問で普通体に終助詞ノが付く
	A2応答文ノ	相手の質問への応答で使用される普通体＋ノ
	A3普通体ノ	上記以外の普通体に終助詞ノが付加
	A3普通体ヨ	普通体に終助詞ヨが付加
	A4普通体ケドネ	普通体に終助詞ケドネが付加

² https://dbms.ninjal.ac.jp/judan_db/ なお使用が数例しか見られなかった表現は含めていない。

日本語学習者のスタイル運用に対する母語話者の評価

誤用	A5普通体ノヨ	普通体に終助詞ノヨが付加	
	A6普通体ノネ	普通体に終助詞ノネが付加	
	A7裸の普通体	終助詞が付かない普通体	
	A8普通体ケド	従属節ケド節に普通体	
	A9普通体カラ	従属節カラ節に普通体	
	A10普通体カナ	普通体に終助詞カナが付加	
	B 確認要求表現	B1デショウ	確認要求表現のデショウ
	C 間投表現	C1ホラ	間投表現ホラ
		C2ナンテイウノ	間投表現ナンテイウノ
		C3間投助詞ネ	文節で挿入される間投助詞のネ
C4ソウネー		間投表現ソウネー	
D 応答表現	D1ウン	相手の質問に対する肯定応答ウン	
E 文法の誤用	E1ハとガ	助詞ハを使うべきところに助詞ガを使用	
	E2二とデ	助詞二を使うべきところに助詞デを使用	
	E3動詞の名詞化	動詞を名詞のように使用	
	E4連体修飾	連体修飾に不必要なノの挿入	
	E5副詞の用法	副詞の用法を間違えて使用	
	E6形容詞過去形態	形容詞の過去形の形態を間違えて使用	
	E7疑問形形態	疑問詞節カドウカに別形式を使用	
	E8複合助詞用法	ニトツテを使用する場面にニタイシテを使用	
	E9動詞の態	動詞の態の間違い	

表2 評価実験調査のスキプトの例 (対教授会話)

<ベース会話>	<スタイルの誤用>
<p>教授：張さんは日本語学校ではどんなことを勉強していたんですか？</p> <p>留学生：そうですね (はい)、私は進学科にいたので、特に試験対策が多かったです。(はい) 例えばこの大学院は、なんていうんですか、あの、出願条件としてですね、NIの取得が義務付けられていますよね。(はい) そういう大学が多いので、日本語学校でも能力試験対策の授業が多かったです。(はい) ま、んー、まーそれが良かったかどうかかわからないですけどね。(はい) まあ結果的には良かったかもしれませんが。(はい) でも会話の授業が少なかったです。その点はちょっと残念だったんですね。(はい) それで今はまだ会話がですね、下手なんですよ。先生は日本語学校と何か関わりがあるんですか？</p> <p>教授：ええ、昔教えていたことはありますよ。それで、論文の書き方は習いました？</p> <p>留学生：はい、習いました。習ったんですけど、あまり詳しくはやりませんでした。</p>	<p>そうですね→そうねー</p> <p>いたので→いたから</p> <p>多かったです→多かった</p> <p>ていうんですか→ていうのでですね→てね</p> <p>いますよね→いるよね</p> <p>多かったです→多かったですけどね→けどね</p> <p>しません→しれない</p> <p>かったです→かった</p> <p>だったんですね→だったんですよ→なのよ</p> <p>んですか？→の？</p> <p>はい→うん</p> <p>ました→ったよ</p> <p>んですけど→んだけど</p>

3.4 音声の録音と刺激会話の作成

音声の録音は役に近い属性の話者に依頼し、役の自然さを保った。「留学生」は大学院で日本語研究に携わる研究員である 30 代女性の韓国語母語話者である。録音に際し、日本語の流暢さには全く問題がなかった。「学生」は同じく大学院に所属する 30 代の日本語母語話者であり、「教授」は日本語学校に勤務する 60 代の日本語母語話者である。録音には Sony の IC Recorder、ICD-SX813 を使用した。音声の録音は他に人が在室していない個室で行い、雑音が入らないように配慮した。³

まずスクリプトの〈対教授ベース会話〉〈対教授スタイル誤用〉〈对学生ベース会話〉〈对学生スタイル誤用〉〈对学生文法ミス〉を録音した。各パートを個別にスクリプトを用いて、より自然になるように読んでもらい録音した。その後、会話をより自然に見せるために相槌も挿入した。自然な相槌を録音するために、「学生」「教授」役の話者に「留学生」の発話をヘッドフォンで聞かせ、「相手が自分に話しているときのように相槌を打って欲しい」という指示のもと、その発話を聞きながら、相槌を打ってもらった。そしてその音声を Sound Engine Free の「ミックス」で音声合成した。⁴なお、音量の差がある場合は、音量調整をして一つの会話として自然にした。

そして、〈ベース会話〉の編集音声を基に、刺激会話（会話 A、会話 B）を作成した。まず調査項目である下線部の前後を切り取り、後に 3 秒の間を挿入し、10 秒ほどの「会話 A（スタイルの正用）」を作成した。その後〈スタイルの誤用〉のスクリプトの下線部を切り取り、元の〈ベース会話〉の音声の該当箇所と入れ替え、丁寧発話に一部カジュアルな表現が入る「会話 B（スタイルの誤用）」を作成した。なお、ここでも単純に切り貼りすると自然に聞こえない部分が見られたため、音量差の調整や、間の挿入など、録音が自然に聞こえるように調整した。さらに、〈对学生文法ミス〉についても、同様に音声編集を行い、一部文法的に不自然な表現が入る「会話 B（文法誤用）」を作成した。⁵会話 A と会話 B を一対とした刺激会話の数は、表 1 の項目の数のように「対教授」は 17 項目の音声、「对学生」は 25 項目となった。刺激会話は「対教授会話」「对学生」の順で並べ、各項目の提示の順番はランダムに並べた。

表 3 実験の刺激会話の 1 例

会話 A（自然なスタイル）	会話 B（スタイルの誤用）
...会話の授業が少なかったです。その点は <u>ちょっと残念だったんですね</u> 。(はい) それで今はまだ...	...会話の授業が少なかったです。その点は <u>ちょっと残念だったのね</u> 。(はい) それで今はまだ...

³ 本論文の留学生役の話者は女性であるが、話者が男性の場合と結果が異なる可能性はある。個人差も含めその点は今後検討を要する課題である。

⁴ なお、「教授」はその形で自然な相槌が挿入できたが、「学生」では、それができなかった。そのため、複数回録音した相槌を「切り取り」、自然に聞こえる箇所に「ミックス」した。

⁵ なお、編集した会話の自然さに関しては、60 代の日本語母語話者 1 名に判断してもらい、問題がないと判断された。1 つ不自然と判断された音声があるが、音声的に合成らしく聞こえるという意味での不自然ではないと判断した上で、考察の際に留意した。

3.5 評価実験

実験対象者は母語話者 52 名であった。内訳は、大学生 29 名（男性 14 名、女性 15 名）、日本語教師（男性 3 名、女性 6 名）、社会人（男性 3 名、女性 11 名）であった。日本語教師は、都内のある一つの日本語学校の 30～60 代の日本語教師である。社会人は、職業訓練として日本語教師養成講座を受けている 20～50 代の社会人である。都内のある大学に通う 10 代後半から 20 代前半の大学生である。もちろん、それぞれのカテゴリ、「大学生」「日本語教師」「社会人」に含まれる被調査者は、それぞれのカテゴリを代表するわけではないため、調査の結果は一般化できず、上述の環境の母語話者の結果としての記述になる。⁶

調査は、2013 年 7 月 25 日～8 月 6 日に行い、大学の研究室や教室内、日本語学校の教室内で行った。全 42 問の調査時間は約 30 分であった。日本語教師 9 名、大学生 16 名に関しては一度に 1～2 名に対して調査し、調査後にその判断に関する自由な聞き取りを行った。大学生 13 名、社会人 14 名に対しては一斉で調査を行い、聞き取りは行っていない。

調査票の例を表 4 に示す。一つの項目（表 1 参照）につき会話 A と会話 B（誤用）をセットで 1 問として評価してもらうことにより、各誤用がどれだけ評価を下げるかわかるようにした。評価項目は「自然さ」「丁寧さ」「個人的な嗜好」の 3 つとした。評価は、「不自然から自然」「失礼から丁寧」「嫌いから好き」の 7 段階であり、各会話、会話 A と会話 B を聞いた後に 10 秒間の間があり、その間に評価をしてもらった。なお、回答に慣れるまでの 5 問程度は、評価者の様子を見ながら回答時間を長くした。

表 4 調査票のサンプル

会話 A		会話 B	
不自然	自然	不自然	自然
----- ----- ----- ----- ----- ----- -----		----- ----- ----- ----- ----- ----- -----	
1	2 3 4 5 6 7	1	2 3 4 5 6 7
失礼		失礼	
----- ----- ----- ----- ----- ----- -----		----- ----- ----- ----- ----- ----- -----	
1	2 3 4 5 6 7	1	2 3 4 5 6 7
嫌だ		嫌だ	
----- ----- ----- ----- ----- ----- -----		----- ----- ----- ----- ----- ----- -----	
1	2 3 4 5 6 7	1	2 3 4 5 6 7

⁶ 渡部（2004）などで、日本語教師の評価は一般的な評価者に比べて評価が厳しいという指摘がされるため、本稿でもその点を調べた。詳細な結果は紙幅の関係上割愛するが、日本語教師は評価が厳しいことが統計的に確認された。

4. 結果と考察

以下では実験の結果をいくつかのポイントに分けて考察していく。まず、4.1 で評価値平均値の記述し、そこから見えることを考察する。4.2 では項目間の評価値の違いを考察することで、誤用の深刻度の分類を試みる。4.3 にて文法項目と評価の下げ幅を比べることでスタイルの誤用の影響の大きさを記述する。4.4 で実験後に得られた母語話者の評価に関するコメントから、その他評価に関わる諸要因を考察していく。

4.1 評価値平均値の記述と考察

実験結果である「スタイルの誤用」に対する母語話者評価の平均値は表 5、表 6 のようになる（会話 A が正用、会話 B が誤用）。表 7 のように尺度間の Spearman の相関係数を見ると、「丁寧さ」と「個人的嗜好」で .981 と非常に高い相関がみられ、二つの評価はほぼ同義と捉えられていると考えられる。つまり相手に相応に丁寧であると感じられれば、自分にとっても好ましく感じるようである。

対教授と対学生の各尺度の平均値を比べると、全ての尺度で対教授会話での平均値が低くなっている。対教授会話 A の平均値は「丁寧さ」「個人的嗜好」「自然さ」がそれぞれ 5.25、5.01、5.36 であり、対学生会話 A の平均値は同項目で 5.60、5.38、5.62 である。対教授会話 B（スタイルの誤用）の平均値は同様に 3.27、3.71、4.48 であり、3.76、4.20、4.55 である。つまり、上下関係がはっきりしている場合など、フォーマル度が高い会話ではより母語話者が求める言葉遣いの質が高くなることがわかる。

また、対教授会話での会話 A「丁寧さ」「個人的嗜好」の項目間の評価値の幅が対学生の会話 A「丁寧さ」「個人的嗜好」よりも大きいことがわかる。対教授会話 A において、「丁寧さ」の評価値は、最大値 5.78、最小値 4.71 で幅が 1.07 である。「個人的嗜好」の評価値は、最大値 5.48、最小値 4.48 で幅 1.00 である。対学生会話 A において、「丁寧さ」の評価値は、最大値 5.92、最小値 5.37 で幅が 0.56 である。「個人的嗜好」の評価値は、最大値 5.62、最少値 5.21 で幅 0.40 である。評価値が低い調査音声の特徴を見ると、共通して使われ、評価を下げていると思われる項目が見られた。それらは、①親しみを表すような音調の「わからないですけどね」、フィラー②丁寧さの感じられない音調の「なんていうんですか」である。つまり、対教授の会話場面のよう上下関係がはっきりする場合、丁寧体を使用していても音声特徴からも発話のぞんざいな印象を受ける場合に評価を下げることになるといえる。対して対学生の会話などでは、そのような細かい点は気にされないようである。

表5 対教授会話「スタイルの誤用」項目の評価値平均及び標準偏差 (SD) (n=52)⁷

項目	会話A						会話B					
	丁寧さ		個人的嗜好		自然さ		丁寧さ		個人的嗜好		自然さ	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
間投助詞ネ	5.34	1.11	4.99	1.08	5.48	1.09	4.42	1.42	4.48	1.18	4.81	1.40
裸の普通体	5.60	1.06	5.35	1.14	5.65	1.07	4.18	1.29	4.50	1.26	5.08	1.25
普通体カラ	5.78	1.00	5.39	1.21	5.67	1.13	4.08	1.48	4.45	1.29	4.98	1.38
普通体ケド	5.06	1.42	4.77	1.34	5.04	1.43	3.94	1.43	4.19	1.19	4.81	1.36
ホラ	4.81	1.49	4.73	1.26	5.25	1.37	3.56	1.54	3.98	1.18	4.81	1.40
普通体ノネ	5.48	1.20	5.23	1.17	5.52	1.05	3.37	1.49	3.81	1.47	4.44	1.54
普通体カナ	5.48	1.23	5.21	1.21	5.38	1.23	3.33	1.34	3.96	1.32	4.67	1.37
質問回答ノ	5.77	1.12	5.48	1.15	5.60	1.20	3.31	1.29	3.83	1.37	4.60	1.47
普通体ノ	4.87	1.40	4.75	1.37	5.08	1.25	3.17	1.17	3.56	1.23	4.46	1.35
ソウナー	5.29	1.26	4.88	1.27	5.29	1.32	3.10	1.21	3.81	1.40	4.23	1.60
普通体ケドネ	5.00	1.39	4.75	1.25	5.15	1.34	3.00	1.18	3.48	1.34	4.58	1.34
確認デショウ	5.27	1.36	5.06	1.28	5.35	1.31	2.98	1.39	3.44	1.17	4.56	1.38
応答ウン	5.17	1.28	5.00	1.27	5.42	1.29	2.79	1.25	3.23	1.46	3.81	1.79
質問文ノ	5.27	1.43	5.02	1.35	5.55	1.26	2.75	1.30	3.12	1.41	4.27	1.56
ナンテイウノ	4.71	1.26	4.48	1.17	5.00	1.24	2.73	1.18	3.29	1.13	4.23	1.41
普通体ナノヨ	5.19	1.24	5.04	1.16	5.37	1.11	2.71	1.23	3.04	1.34	4.12	1.51
普通体ヨ	5.10	1.39	4.96	1.26	5.40	1.23	2.21	1.12	2.83	1.34	3.65	1.58
平均	5.25		5.01		5.36		3.27		3.71		4.48	
幅	1.07		1.00		0.67		2.21		1.67		1.42	

表6 対学生会話「スタイルの誤用」項目の評価値平均及び標準偏差 (n=52)

項目	会話A						会話B					
	丁寧さ		個人的嗜好		自然さ		丁寧さ		個人的嗜好		自然さ	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
間投助詞ネ	5.46	1.26	5.25	1.27	5.46	1.28	4.65	1.28	4.75	1.31	4.96	1.30
裸の普通体	5.67	1.24	5.50	1.18	5.67	1.16	4.44	1.23	4.92	1.14	4.71	1.45
ホラ	5.52	1.12	5.31	1.15	5.48	1.17	4.35	1.24	4.58	1.43	5.06	1.26
普通体カラ	5.90	1.02	5.58	1.13	5.81	1.16	4.15	1.36	4.67	1.37	4.96	1.52
質問回答ノ	5.83	1.10	5.62	1.20	5.90	1.00	4.10	1.24	4.48	1.39	4.77	1.40
デショウ	5.58	1.10	5.38	1.20	5.67	1.12	4.00	1.47	4.54	1.51	4.85	1.68
普通体ケド	5.48	1.31	5.27	1.35	5.52	1.25	3.83	1.50	4.31	1.58	4.63	1.52
普通体ノ	5.56	1.18	5.31	1.28	5.63	1.14	3.79	1.41	4.15	1.49	4.77	1.50
応答ウン	5.92	1.05	5.58	1.10	5.96	0.94	3.65	1.43	4.15	1.74	4.04	1.80
ソウナー	5.71	1.25	5.44	1.26	5.67	1.17	3.65	1.58	3.98	1.54	4.37	1.74
普通体ケドネ	5.37	1.36	5.21	1.35	5.31	1.37	3.60	1.40	4.04	1.52	4.53	1.54
普通体カナ	5.58	1.23	5.37	1.27	5.58	1.12	3.50	1.38	4.15	1.54	4.52	1.59
ナンテイウノ	5.38	1.32	5.23	1.23	5.42	1.29	3.31	1.35	3.87	1.52	4.40	1.62
質問文ノ	5.77	1.28	5.48	1.32	5.87	1.14	3.19	1.36	3.63	1.48	4.40	1.60
普通体ナノヨ	5.38	1.29	5.23	1.25	5.40	1.11	3.17	1.34	3.54	1.34	4.27	1.44
質問回答ヨ	5.52	1.23	5.33	1.22	5.56	1.12	2.81	1.30	3.38	1.52	3.56	1.71
平均値	5.60		5.38		5.62		3.76		4.20		4.55	
幅	0.56		0.40		0.65		1.85		1.54		1.50	

⁷ 評価項目「質問文ノ」、「普通体カラ」「間投助詞ネ」でそれぞれ無回答が一件あり、欠損値として扱った。また、会話Aが正用で会話Bが誤用と、音声提示の順番が決まっているため、会話Bの評価が多少自然に下がってしまうことも確認された。

表7 「スタイルの誤用」項目における各評価尺度間の Spearman の相関係数 (n=33)

		丁寧さ	個人的嗜好	自然さ
丁寧さ	相関係数	1.000	.981**	.824**
	有意確率 (両側)	.	.000	.000
個人的嗜好	相関係数	.981**	1.000	.819**
	有意確率 (両側)	.000	.	.000
自然さ	相関係数	.824**	.819**	1.000
	有意確率 (両側)	.000	.000	.

4.2 項目間の評価値の違いの分類

スタイルの誤用には、項目によって評価値の差が見られ影響の大きさが項目によって異なることが表 5,6 からわかるが、これらの差が偶然の差なのか、それとも影響の大きさによって分けられるかということを考察していく。

対教授会話で項目ごとの評価値の違いを見ると、階層があるように見える。そこで、Mann-Whitney の U 検定にて、項目間の有意差を調べた。便宜的に「丁寧さ」評価値が最も高い「間投助詞ネ(6)」と、数値に意味のある差があると見られる「ケド節の普通体(2)」「間投表現ホラ(9)」の間でそれぞれ検定にかけたところ、「間投助詞ネ(6)」と「ケド節の普通体(2)」には有意な差が認められず ($P=0.1>0.05$)、「間投助詞ネ(6)」と「間投表現ホラ(9)」に有意な差が認められた ($P=0.004<0.01$)。⁸

さらに、「間投表現ホラ(9)」と「確認要求表現デショウ(5)」「応答表現ウン(14)」の間の有意差を調べた。その結果、「間投表現ホラ(9)」と「確認要求表現デショウ(5)」の間で有意な差が認められず ($P=0.065>0.05$)、「間投表現ホラ(9)」と「応答表現ウン(14)」の間で有意な差が認められた ($P=0.014<0.05$)。つまり、「応答表現ウン(14)」とそれより評価値が低い「質問のノ(17)」「ナンテイウノ(3)」「ナノヨ(15)」「ヨ(12)」は著しく評価を下げる項目と考えることができるとされる。

つまり、対教授会話ではスタイルの誤用の深刻度は三つの段階があり、間投助詞「ネ」の使用や働きかけの弱い普通体（従属節の普通体、文末裸の普通体）が評価に影響する度合いが低く、相手に強く働きかける普通体（疑問文のノ、普通体+ヨ、ノヨ）と応答詞「ウン」が特に評価に影響するようである。これは、野田（1999）で考察されている母語話者のスタイルシフトの基準と一致していると言える。対教授では、形式を中心とした言葉遣いが印象形成に関わる影響が強いと言える。

対して対学生会話では、相手に強く働きかける普通体（疑問文のノ、普通体+ヨ、ノヨ）の評価が低い点以外、項目間の評価値の間に明確な差が見られないようである。評価値の幅も対教授会話よりも低い（対教授会話 B 「丁寧さ」幅 2.21、対学生会話 B

⁸ 項目間でクラスタ分析をかけた結果、同様の結果のグループ分けが確認された。また「個人的嗜好」について Mann-Whitney の U 検定をかけたが同様の結果が確認された。

「丁寧さ」幅 1.85)。対学生の場合は表現形式の影響だけでなく別の要因が働く可能性が高い。その要因は明確にはわからないが、次小節のコメントでみられる、表現の混ざり方の不自然さが評価に大きく影響しているのではないかと考えられる。

4.3 文法項目の平均値との比較

次に、文法の誤用の評価値と比較考察することで、その影響をより明確にしていく。表 8 にて、対学生会話の会話 B（文法の誤用）の評価値平均及び標準偏差（SD）を記述する。会話 B の「評価値平均」は、「丁寧さ」が 4.94、「個人的嗜好」が 4.79、「自然さ」が 4.06 である。スタイルの誤用の「丁寧さ」が 3.76、「個人的嗜好」が 4.20、「自然さ」が 4.55 であり、比べると「丁寧さ」は文法ミスの方の値が高く、「自然さ」はスタイルの誤用の方の値が高い。これは自然なことであると言える。「個人的嗜好」は「文法ミス」の方の値が高い。項目によっては「文法の誤用」の方がスタイルの誤用より評価を下げるものも存在する。「間投助詞ネ」「裸の普通体」「ホラ」「普通体カラ」「質問回答ノ」「確認要求デショウ」は、「文法ミス」の最小値より値が大きい。つまり、文法よりスタイルの方が会話では重要であるが、より重視すべき点とそうでない点に分けられると考えられる。それでも全体的に評価を下げるのは「文法の誤用」よりも「スタイルの誤用」であり、スタイル運用の規範からの逸脱は文法を間違えることより母語話者評価の観点から深刻であると言うことができる。

表 8 「文法の誤用」項目の評価値平均及び標準偏差 (n=52)

項目	会話A						会話B					
	丁寧さ		個人的嗜好		自然さ		丁寧さ		個人的嗜好		自然さ	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
誤・形容過去	5.81	1.04	5.52	1.10	5.71	1.08	5.00	1.30	4.75	1.25	3.46	1.43
誤・動詞の名詞化	5.63	1.13	5.44	1.20	5.65	1.14	5.25	1.24	5.13	1.23	4.54	1.67
誤・ハとガ	5.87	1.14	5.63	1.16	5.81	1.02	5.10	1.47	4.96	1.45	5.02	1.41
誤・語用法	5.46	1.22	5.40	1.15	5.73	1.09	4.81	1.36	4.69	1.34	4.08	1.65
誤・動詞の態	5.40	1.36	5.13	1.30	5.48	1.23	4.79	1.52	4.65	1.48	4.00	1.39
誤・二とデ	5.69	1.23	5.40	1.27	5.54	1.22	5.00	1.47	4.83	1.54	3.87	1.52
誤・疑問形	5.29	1.32	5.12	1.22	5.37	1.18	4.65	1.43	4.65	1.43	4.15	1.66
誤・ニタイシテ	5.50	1.14	5.17	1.20	5.35	1.27	4.85	1.49	4.58	1.54	3.63	1.66
誤・連体修飾	5.79	1.13	5.58	1.20	5.90	1.00	5.06	1.34	4.85	1.39	3.81	1.64
平均値	5.60		5.38		5.62		4.94		4.79		4.06	
幅	0.58		0.52		0.56		0.60		0.56		1.56	

4.4 実験評価者のコメントからの考察

実験参加者（日本人評価者）に実験後に何が評価に影響したかなどを自由に聞き取ったところ、以下のようなコメントが得られた。なお箇条書きの一項目ごとに一人のコメントである。コメント全体を見ると (A) スタイルの誤用の影響が大きいことを評価者が自覚していること、(B) 学習者自身の発話全体が評価に影響する場合があること、(C) スタイルの誤用以外にも影響する要因があること (D) 母語話者自身の接触経験が評価に影響すること、などがわかる。つまり、スタイル運用の規範からの逸

脱は母語話者評価を下げるため教える重要性が高いが、母語話者が学習者の発話を評価する観点は多様であることを考えなければならない。崔 (2009) で明らかになっているように、母語話者は日本語学習者の印象を言語形式以外で評価する部分も大きい。教える際にはスタイル運用の逸脱に過度に注目することがないように配慮しなければならないであろう。その中でも働きかけが強い普通体 (質問文ノ、ヨ、ヨネ) は避けること、対教授会話などフォーマル度が高い場面では使用形式に気を遣うべきだということとは指導するべきであると言える。

- 親戚に韓国人がいるため、妙に親近感がわいてしまう。(D)
- 談話全体として日本人だったら言わないものが入っているから失礼だと感じた。語尾伸びも気になる。何が自分で気になるかが分かった。(A) (C)
- 教授と同級生では感覚が違うと感じた。また、同級生の場合、組み合わせによって全然感覚が違う。「うん」と何が混ざるかなど (A)
- 個人的嗜好の判断が難しかった。どうしても丁寧さに左右されてしまう。
- 外国人の話はなれているから自然か不自然かの判断が甘くなったと思う。あまり気にならない。(D)
- 留学生だからデス・マスや敬語を使わなくても気にならない。でもため口はきになる。「ほら」とか「だよね」のような表現が気になる。(A) (C)
- 出願条件が聞きにくく評価が下がった (C)
- 普段の留学生との関わりで慣れている。明らかに日本語間違っているところは直ぐにわかるから評価が下がる。ため口と敬語がまざる、なれなれしい。(A) (D)
- ため口だけならいいけど、混ざるのは気持ち悪い気がした。(A)
- 文法ミスはとても気になって、留学生でも正しい日本語で話した方がいいと思った。(D)
- 丁寧体が使えているかが大きな要因だった。イントネーションも影響 (日本語としておかしいところ)。丁寧失礼が好きか嫌いかに影響。自然さと丁寧さは別。「なんていうんですか」は、口調になれなれしさがある。その裏になれなれしさが読める。「なれなれしさ」が読みとれるものは嫌だった。(A) (D)
- 韓国人のチューターをやっているから、身近に感じたから、慣れている。感覚がちよっと違うかもしれない。突然丁寧体が入ると気になる。(D)
- 全体的に耳に付くしゃべり方で、生理的に受け付けない。だから全体的に好き嫌いの評価が悪い。(B)
- 不自然でもあまり丁寧か、好きかの評価は変わらない。
- 「ので」と「から」は特に気になった。(A)

5. スタイル教育の必要性

実験から明らかになった日本語学習者のスタイル運用の母語話者評価への影響は、次の4点にまとめられる。

- (1)スタイルの誤用は母語話者評価に大きな影響がある
- (2)母語話者の評価を下げる度合いは運用規範に準ずる
- (3)対話者との距離が大きいほどスタイル運用の評価への影響が大きい
- (4)発話の印象評価には別の要因も強くかわる

つまりスタイル運用の指導は必要であり、初級から一貫して丁寧体と普通体を使い分ける指導が求められる。ゼロレベルから大学入学レベルの上級から超級を目指す日本語教育は、4技能の総合的な初級カリキュラムを終えた後、会話、読解、聴解、漢字などスキルベース、コンテンツベースの教育に移行することが一般的だと思われる。そのような日本語教育のカリキュラムの中では①初級の段階普通体と丁寧体の使用場面を認識すること②中級以降の会話授業でスタイルの使い分けを十分に教えること、の重要性が指摘できる。

まず初級の段階では、普通体の形の導入をする中で、丁寧体と普通体がどのような場面で使われるのかを学習者に認識させる必要がある。初級の段階でそのような認識が形成されないと、学習者の中で間違ったスタイル運用の規範が形成される可能性があるからである。多くの初級教科書は場面に不適切なスタイル運用が会話例に見られるため（この点は稿を改めて論じたい）、学習者がスタイルの使い分けを学ぶ上での障害とならないように注意が必要である。中級以降は集中的にスタイル運用に注目した教育が必要である。スタイルの切り換えは、何をどう使い分けるかについての知識と、実際に運用する習慣という二つの側面があり、その両側面を実際に会話教育に組み込むことが望まれる。形式の使い分けの規範に関する学習に加え、習慣づけのためのスタイル運用練習を行うとともに、間違ったスタイル運用に対する誤用訂正を積極的に行うスキルベースの学習を組み込むことが求められるであろう。

6. まとめ

本稿では、日本語学習者が丁寧体使用場面でカジュアルな表現を使用する場合の母語話者評価への影響を実験的に明らかにした。その結果、不適切なスタイル運用は母語話者の評価を下げる幅が大きいという結果が得られた。そのため、初級から一貫した丁寧体と普通体の使い分けの指導が必要であり、中級以降には十分に時間をとってスタイル運用について学習、会話練習を行う必要があると指摘した。

参考文献

- 李吉鎔 (2003) 「フォーマルな談話での非デスマス形式の切換え—日本語母語話者と中間言語話者の比較—」『阪大社会言語学研究ノート』5:79-96 大阪大学大学院文学研究科社会言語学講座
- 李吉鎔 (2005) 『日本語学習者のスタイル切り替え能力の発達—韓国語母語話者を対象に—』大阪大学博士論文
- 今村圭介 (2013) 「英語母語日本語学習者におけるスタイル変異形式の使用規則の形

研究論文

- 成—使用実態と使用意識に着目して—『日本語/日本語教育研究』4号 pp145-161
ココ出版
- 上仲淳 (2007) 「中国語を母語とする上級日本語学習者のスピーチレベルの選択基準」
『大阪大学言語文化学』16:141-154 大阪大学言語文化学会
- 小林ミナ (2000) 「『何』を教えるかの再吟味—日本人評価研究の意義と限界—」『北
海道大学留学生センター紀要』4:149-159 北海道大学留学生センター
- 小林ミナ編 (2004) 『日本人は何に注目して外国人の日本語運用を評価するか』(平成
12年度～平成15年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書)
- 崔文姫 (2009) 『日本語学習者に対する日本語母語話者の印象形成—学習者の発話に
関する評価を基準に』首都大学東京 博士論文
- 寺尾綾 (2010) 「文末形式の運用とスタイル切り換え—日本語を学ぶ中国語母語話者
の縦断データから—」『阪大日本語研究』22:113-142
- 野田尚史 (1998) 「「ていねいさ」からみた文章・談話の構造」『国語学』194:1-14 日
本語学会
- 野田尚史編 (2005) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- 野田尚史編 (2012) 『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版
- 山内博之 (2004) 「OPI 評価基準に関する一考察—日本人評価の観点から—」(小林
2004a 採録) 67-75
- 横溝紳一郎 (2004) 「日本語母語話者評価に関する研究結果を教育・研究にどう活か
すのか?」(小林 2004a 採録) 286-307
- 渡部倫子 (2004) 「日本語母語話者は何に注目して学習者の発話を評価するか」(小林
2004a 採録) 76-93
- Bell, A (1997) Language style as audience design, Coupland, N Jawoski, A (eds),
sociolinguistics: a Reader and Coursebook, London: Palgrave

(いまむら けいすけ・東京医科歯科大学 助教)